

超高齢者にみられた広範な口腔乳頭腫の1例

藤 樹 亨・富 永 和 宏・山 邊 滋・水 野 明 夫
藤 田 修 一*・岡 邊 治 男*

A case of an extensive papilloma in the oral cavity of
an extremely elderly patient

Toru FUJIKI・Kazuhiro TOMINAGA・Shigeru YAMABE・Akio MIZUNO
Shuichi FUJITA*・Haruo OKABE*

J.J.O.M.S. 41 (2) : 157—159 1995

「日本口腔外科学会雑誌」第41巻 第2号（平成7年）別刷

Jpn. J. Oral Maxillofac. Surg. Vol. 41 No. 2 1995

超高齢者にみられた広範な口腔乳頭腫の1例

藤 樹 亨・富永 和宏・山 邊 滋・水野 明夫
藤田 修一*・岡 邊 治男*

A case of an extensive papilloma in the oral cavity of an extremely elderly patient

Toru FUJIKI・Kazuhiro TOMINAGA・Shigeru YAMABE・Akio MIZUNO
Shuichi FUJITA*・Haruo OKABE*

Abstract: An extensive papilloma in the region of the alveolar ridge of the right maxilla, palate and buccal mucosa is described. A 95-year-old woman was referred to our clinic for a swelling in the maxilla. Both physical and radiographic findings mimicked a carcinoma, but the histopathologic diagnosis was a papilloma. The tumor disappeared after chemotherapy. So far, her clinical progress has been satisfactory for 2 years and 7 months.

Key words: extremely elderly patient (超高齢者), oral papilloma (口腔乳頭腫), chemotherapy (化学療法)

緒 言

乳頭腫は各年代を通じてみられる粘膜および皮膚に生じる良性の上皮性腫瘍である。口腔領域に出現する乳頭腫の臨床病態像は多様であり、比較的大きな乳頭腫は良性・悪性境界病変の1つとして治療方針の決定に難渋することが多い。最近、われわれは、95歳という超高齢者の頬粘膜、上顎顎堤粘膜および口蓋粘膜の広範な領域に生じた乳頭腫に対して化学療法が奏功した1症例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患 者：95歳 女性。

初 診：1991年5月1日。

主 訴：右側上顎顎堤粘膜の腫瘍形成。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：10年前より高血圧症にて降圧剤を服用中。

長崎大学歯学部第一口腔外科学教室

(主任：水野明夫教授)

*長崎大学歯学部口腔病理学講座

(主任：岡邊治男教授)

1st Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Nagasaki University School of Dentistry (Chief: Prof. Akio Mizuno)

*Department of Oral pathology, Nagasaki University School of Dentistry (Chief: Prof. Haruo Okabe)

受付日：平成6年8月5日

3年前、腰椎損傷にて3か月入院加療。

現病歴：1991年4月上旬(初診の1か月前)頃より、右側上顎大臼歯相当顎堤粘膜の小指頭大の無痛性腫瘍に気付くも放置した。その後、同腫瘍は増大し、義歯の装着が困難となり同年4月30日、某歯科医院を受診し、翌日当科を紹介された。なお、義歯に関する現病歴としては、10年前から現在まで同一総義歯を使用している。

現 症

全身所見：体格は小柄、栄養状態はおおむね良好で他に特記すべき所見は認められなかった。また、顔面所見に異常はみられなかった。

局所所見：口腔内は上下顎無歯顎でそれぞれ総義歯が装着されていた。開口障害はなく、右側頬粘膜、上顎顎堤粘膜および軟口蓋粘膜にわたる大きさが45×45×15mmで境界が明瞭な腫瘍がみられた。その腫瘍は赤褐色でおおむね表面が細顆粒状であるが、一部に白斑および潰瘍を有しており、弾性硬であった。腫瘍周囲に硬結はなく、腫瘍の圧痛ならびに出血は認められなかった(写真1)。

X線所見：オルソパントモグラフにおいて、腫瘍に相当する右側上顎臼歯相当顎骨に、不規則な骨破壊を思わせる像がみられた(写真2)。

病理組織学的検査および所見：初診時、頬粘膜および顎堤粘膜の複数か所より生検を行った。H-E染色標本において重層扁平上皮の乳頭状増殖と錯角化をとも



写真1 初診時口腔内写真



写真3 病理組織像 (H-E 染色, 原倍率×160)

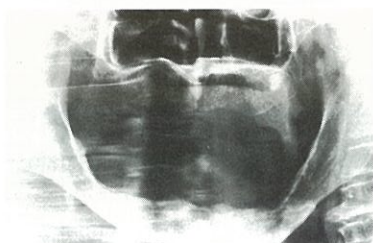


写真2 初診時オルソパントモグラフ



写真4 治療後の口腔内写真



写真5 治療後のオルソパントモグラフ

なう中等度の棘細胞の肥厚がみられたが、明確な上皮性異形成は認められず、また基底膜はよく保たれていた。粘膜固有層にはリンパ球を主体とした慢性炎症性細胞の浸潤が認められた(写真3)。

病理組織学的診断：乳頭腫

処置および経過：初診時よりテガフル徐放性製剤(サンフラールS®) 1日 600mg の投与を開始した。投与14日後、すなわち総量 7.2g を投与した時点で、腫瘍は急速に縮小し表面の平滑化を認めた。その後1週間、プレオマイシン軟膏の局所塗布(2回/日)を行うことにより、肉眼的に腫瘍は消失した。また、治療開始後6か月のオルソパントモグラフにおいて、上顎骨の破壊を思わせた像も改善された(写真4、5)。その後、本腫瘍発生の誘因の1つとも考えられた不適合の旧義歯について本院補綴科を受診させ、上下顎新義歯の製作を行った。治療後、2年7か月の現在、再発なく経過は良好である。

考 察

乳頭腫は、被覆上皮が乳頭状に発育隆起した良性の上皮性腫瘍である。口腔領域においては慢性刺激による反応性変化とみなされることが比較的多いものの、前癌病変として悪性化の可能性もあるため注意すべき疾患のひとつである。本症の好発年齢は中・高齢者で、性差に有意差はなく、好発部位は舌および口蓋が多く、頬粘膜、歯肉、口唇などが続くと考えられている¹⁻³⁾。腫瘍の大きさについて、滝川ら⁴⁾は米粒大から大鶏卵大のものがみられ、小指頭大のものが平均的であると記している。本報告例のように95歳という超高齢者に

おける広範な乳頭腫の出現はかなりまれであると思われる。なお、本症のうち多発性、癒合性で広範囲に生じたものを、特に oral florid papillomatosis (以下 OFP と略す) と呼ぶことがあり、しかも OFP と疣状癌との異同について見解が一致しておらず、最近では同一疾患とみなす概念もある⁵⁾。

本報告例において、初診時に右側頬粘膜、上顎顎堤粘膜および口蓋粘膜にわたる広範な腫瘍形成がみられ、その腫瘍相当の顎骨において、不規則な骨吸収像が認められたことより、臨床的には扁平上皮癌あるいは疣状癌の可能性が強く示唆された。しかしながら、複数箇所から行った生検材料の病理組織学的所見では、明らかに悪性と疑える所見は認められなかった。数回にわたる生検あるいは全切除物ではじめて疣状癌と診断されることもあるという報告⁶⁾や広範な乳頭腫は OFP を含め組織学的に癌腫に類似しており、実際に癌化したという報告⁷⁾を考え合わせ本例においては疣状癌に準じた治療方法を選択する事が必要であると思われた。

比較的大きな乳頭腫, OFP および疣状癌などを含めた治療法について文献的報告を整理すると, 外科的切除, 化学療法, 凍結療法, 放射線療法, ビタミン A の大量投与, 5-Fu 軟膏ないしステロイド軟膏の塗布などが試みられている. 切除可能な症例に関しては外科的切除が最良であると思われる. しかしながら, 広範囲なものに対しては機能的・整容的な問題, および不完全な切除による再発の可能性があるという点で問題がありうる. 一方, 放射線療法において, 無効であったり照射後に悪性化をみた報告および周囲の健康組織に対する影響が強いという理由により, 現在では消極的な見解が多い. 一方, 化学療法ではブレオマイシンやメソトレキソートの種々の投与方法にて効果がみられたとの報告^{2, 8, 9)}がみられる. 本報告例の場合, 患者が老年医学的分類¹⁰⁾の超高齢者であったため, 低下した予備能を考慮するとともに, 病変の存在部位や広がり, さらに予想される術後機能障害などについて検討を加えた結果, 外科的治療を第一選択とはしなかった. そこで腫瘍の縮小効果を期待し, また, 生検部位以外に存在する可能性もある癌化病巣に作用し, しかも比較的副作用が少ないとされているテガフル徐放性製剤の投与を行った. その結果, 腫瘍は急速に縮小し, さらにブレオマイシン軟膏の局所塗布で肉眼的に腫瘍を消失させることができ, さらに X 線写真上で骨破壊を思わせた像の改善もみられた. 病理組織学的に癌腫とみなされる所見はなかったものの, 癌腫に移行する可能性があるという乳頭腫の生物学的特性や文献的にみられる抗腫瘍剤の使用が悪性化を促すことがあるという警告をも考え合わせ, 事情が許すかぎり今後注意深い経過観察が必要であると思われる.

結 語

今回, われわれは, 95 歳という超高齢者の口腔粘膜の広範な領域にみられた乳頭腫に対し, 抗腫瘍剤の投与により奏功した 1 例を経験したので, その概要を報

告した.

なお, 本論文の要旨は第 11 回日本口腔腫瘍学会総会 (平成 5 年 1 月 29 日, 新潟) において発表した.

引 用 文 献

- 1) 永井 格, 山本悦秀, 他: 口腔領域に発生した乳頭腫 85 例に関する臨床病理学的検討. 日口外誌 29: 66-72 1983.
- 2) 三宅正彦, 石井俊彦, 他: 口腔粘膜における良性・悪性境界病変の 3 例. 日口外誌 35: 266-273 1989.
- 3) 作田正義, 中村 浩, 他: 口腔内に発生した乳頭腫の臨床的病理組織学的検討. 日口外誌 29: 59-65 1983.
- 4) 滝川富雄, 吉田好輝, 他: 頬粘膜に生じた巨大な乳頭腫の 1 例. 日大歯学 44: 307-312 1970.
- 5) 井出文雄, 岡崎満雄, 他: 口腔領域における腫瘍および腫瘍性病変の病理形態学的研究—Verrucous carcinoma と Oral florid papillomatosis について—. 日大歯学 51: 697-701 1977.
- 6) 山城正宏, 八木政明, 他: 口腔領域に生じた Verrucous carcinoma の 1 例. 日口外誌 22: 6-10 1976.
- 7) 米田和典, 立木行宏, 他: 前癌病変から癌化したと思われる口腔扁平上皮癌に対する臨床ならびに病理組織学的検討. 癌の臨床 37: 965-972 1991.
- 8) 川勝賢作, 宮崎 正, 他: 乳頭腫, 白板症, 疣状癌腫に対するブレオマイシンの臨床使用経験. 日口外誌 18: 500-507 1972.
- 9) 富島 修, 山城正宏, 他: Oral florid papillomatosis の 1 例. 日口外誌 35: 148-153 1989.
- 10) 蔵本 築, 松下 哲, 他: 超高齢者の臨床病理的研究 90 歳以上の老年者の疾患の特徴とその診断率について. 日老医誌 17: 165-173 1979.